

大学の戦略と教育可能性に関する 学生寮シンポジウムの報告

森 邦 昭

平成24年(2012年)8月31日に、お茶の水女子大学共通講義棟2号館201室において、お茶の水女子大学学生支援センター主催、独立行政法人日本学生支援機構後援により、文部科学省特別経費プロジェクト「統合型学生支援システムの構築による女子高等教育機会の保証」の一環として、「学生寮シンポジウム～大学の戦略と教育可能性～」が開催された。司会進行は、望月由起氏(お茶の水女子大学学生支援センター准教授)だった。

福岡女子大学では、平成23年度(2011年度)から、新学部(国際文理学部)が発足し、それに併せて1年次学生の全寮制が始まった。こうしたことから、「大学の戦略と教育可能性」をテーマに掲げた学生寮シンポジウムの開催には関心を抱かざるをえなかった。そういうわけで、本学からは、学務部学生支援班の職員1人と報告者である筆者の2人がこのシンポジウムに参加した。以下、シンポジウムの概要について報告する^{*(註)}。当日のプログラムは、次のとおりである。

13:00-13:10 開会挨拶 羽入佐和子氏(お茶の水女子大学学長)

13:10-13:40 首都大学東京の取り組み事例

『桜都寮』の四季～首都大学東京の学生支援～

西村和夫氏(首都大学東京学生サポートセンター副
センター長)

今関理恵氏(首都大学東京学生課長)

13:40-14:10 京都産業大学の取り組み事例

自主性・社会性を養う1年生中心の「教育寮」の実際

井上嘉規氏（京都産業大学学生部事務部長）

測上知己氏（京都産業大学学生部課長（寮務担当））

14:10-14:40 立命館アジア太平洋大学の取り組み事例

APハウスにおける実践的な取り組み／APハウスにおける学生の学びとは？

松本 淳氏（立命館アジア太平洋大学スチューデント・オフィス課長補佐）

力丸晃也氏（立命館大学文学部教務職員）

14:40-15:10 お茶の水女子大学の取り組み事例

お茶大 SCC の取り組み～学生支援プログラムの実践と課題～

桂 瑠以氏（お茶の水女子大学学生支援センター講師）

瀬田すみ恵氏（お茶の水女子大学お茶大 SCC サポーター）

休憩

15:20-15:55 フロアディスカッション（質問紙による質問への回答）

15:55-16:00 閉会挨拶 耳塚寛明氏（お茶の水女子大学理事・副学長）

お茶の水女子大学の羽入学長から、次のような開会挨拶がなされた。このシンポジウムの参加者数は、北海道から九州までの全国から約200人（事務職員が約9割、教員が約1割）である。この参加者数は、学生寮が注目されていることを実感させる数字である。お茶の水女子大学には、2つのコモンズがある。1つは、お茶大 SCC（Ochanomizu University Students Community Commons）である。お茶大 SCC は、人と人とのつながりを大切にする新しいタイプの学生寮である。（ちなみに、お茶の水女子大学には、3つの学生寮がある。お茶大 SCC、国際学生宿舎、小石川寮の3つである。）もう1つは、附属図書館のラーニング・コモンズである。図書館のコモンズは2007年に設置され、「ともに学び、ともに成長する」がその理念である。ここでは壁を取り払ってガラス張りにし、中の様子が外から見えるようにした。お茶大 SCC は、図書館でのラーニング・コモンズの成功を生かして構想された。お茶大 SCC の理念は「ともに住まい、ともに成長する」で、2011年度に第1期生が入寮した。お茶の水女子大学は、1875年の創立で、137年の歴史を有し、その

間一貫して女性リーダーの育成を行ってきた。寮についても、女性リーダー育成のための教育の一環として位置づけている。

1 首都大学東京の取り組み事例

『桜都寮』の四季～首都大学東京の学生支援～

このことについて、西村和夫氏から以下の報告がなされた。今から7年前に4つの都立大学が統合されて、新しい「首都大学東京」が立ち上げられたとき、石原都知事、西澤学長、高橋理事長らが「学生同士が触れ合い、切磋琢磨できる自治寮を作ろう」と話し合ってきたのが「桜都寮」（おうとりょう）である。ちなみに、首都大学東京には、遠距離通学者と経済困窮者を対象にしたもう1つの寮である「寄宿舎」が設置されている。寄宿舎は厚生寮で、桜都寮は教育寮である。

桜都寮に入寮するためには、選考で合格しなければならない。第1次選考が小論文、第2次選考が面接で、平成24年度の競争率は1.8倍だった。収容人数は、男子60人、女子24人、合計84人である。入寮期間は、原則1年次と2年次の2年間である。ただし、毎年数人の学生がオブザーバーとして寮に残る。

寮生は、6人1組のユーティリティという単位で共同生活を送る。6人の共同スペースを中心にして、その周りに6つの個人用居室（約10㎡の洋室）がある。少年少女から大人へと変化していく大切な時期である大学1～2年生という時期を、共同生活のなかで他者を理解し、他者と語り合い、刺激を与え合いながら過ごす、一生の友達ができ、自らの成長が実感でき、何物にも代えがたい財産ができる。

桜都寮には、セミナー部、イベント部、対外交流部、ボランティア部、集会室開放部、広報部があり、寮生は必ずいずれかの「部」に所属しなければならない。

セミナー部の活動が、桜都寮の根幹をなす活動である。桜都寮では、原則毎週1回は講演会、グループディスカッション、ディベートなどを開催している。このようなセミナーを寮生たちで運営するというのがセミナー部の活動である。セミナーを開催することによって、セミナーの企画に沿って学びを得ることと、寮生同士でまじめな話ができる環境を作ることの2つをめざ

している。

イベント部では、寮生が普段の生活で密度の濃い話をするためには絆が必要だと考えのもと、その絆を強化するためのイベントを企画実施している。たとえば、新入生歓迎イベント、寮内対抗音楽祭、夏合宿、大運動会（12月開催予定）などがある。

対外交流部は、寮生に対して外部との交流の機会を提供することを目的にして、2011年度に新しく設立された部である。外部との「多数対多数」の交流を通して、寮生により広い視野、より深い考えをもってもらようにすることをめざしている。主な活動内容としては、和敬塾交流セミナー、留学生交流セミナー、寄宿舍交流セミナーなどがある。和敬交流セミナーでは、50年以上の歴史を有する目白の「和敬塾」との交流を通して、寮という組織について語り、寮生が何をすべきかを考えている。（和敬塾とは、公益財団法人和敬塾という名称の男子大学生寮である。この寮では、早稲田大学や東京大学など50以上の大学に通う男子学部生・大学院生・留学生が共同生活を送っている。）留学生交流セミナーでは、グローバル化する現代社会において、外国人留学生との交流を通して、日本人としてどう行動すればよいかを考えている。寄宿舍交流セミナーでは、首都大学東京の寄宿舍（寮）の寮生との交流を通して、どうすればより住み心地の良い寮になるかを考えている。

ボランティア部では、キャリアとしてのボランティアではなく、外部活動のなかで多様な価値観を学び、自ら行動することによって個人の成長や寮全体の成長をめざす活動を推進している。ボランティア部が企画運営している主な活動としては、毎週金曜日の早朝に南大沢駅周辺の清掃活動を行う「早朝清掃ボランティア」（通称“朝ボラ”）、地域の学童と一緒にもちつき大会を行う「もちつき大会」、交流のある各団体から受けたボランティアの依頼を寮生に紹介する「外部ボランティア紹介」、寮生自身の体験を踏まえてボランティアについての意見交換を行う「ボランティアセミナー」がある。

集会室開放部とは、寮のなかにある「集会室」という場を通して寮生間の交流促進を目的とする部である。集会室を寮のユーティリティにすることを活動理念に掲げている。読書会や勉強会、小セミナーや映画鑑賞などの室内活動を通して、さまざまな教養を身に付ける活動を行っている。この部は、第4期（ちなみに、現在は第7期）からできた部である。イベント部と総務局の仕事をもらいうけるかたちで発足した。

広報部では、桜都寮公式ブログの運営、セミナー時の感想用紙の配付回収、寮掲示板の管理、寮ホームページの運営、寮生専用の写真共有サイトの運営などを行っている。寮紹介のパンフレットの作成も行っている。こうした活動を通して、寮生同士の交流の促進と寮活動の外部へのアピールをめざしている。

以上の6つの「部」の他に、会計業務やセミナー出欠管理業務などを担当している総務局、大学祭実行委員会、春合宿委員会などがある。桜都寮の目的は「社会で役立つ人材を育てること」であり、人間形成の場としての桜都寮では、その目的を達成するための学生による活動が行われている。ちなみに、次の表は平成23年度のセミナー一覧である。

	平成23年度セミナー一覧（一部予定）	
4月8日～9日	新歓合宿セミナー「桜都寮紹介」	
4月14日	ブレンストーミングセミナー「大学生としてやりたいこと」	コミュニケーション能力の 向 上
4月21日	スピーチ大会「S 1 グランプリ～今年度の目標～」	
4月28日	他已紹介「コミュニケーション総まとめ」	
5月12日	イベントセミナー「ウォークラリー」	
5月26日	防災セミナー「防災について考える。DIGを体験しよう！」 講師 野口庄司氏 八王子市安全部防災課 課長補佐兼主査	
6月2日	講演セミナー「リーダーシップについて」 講師 森下裕介氏 株式会社マクスウェルホールディングス代表取締役会長	今必要と されている リーダー シップとは？
6月9日	ディスカッションセミナー「リーダーについて考える」	
6月16日	理事長講話「桜都寮生に期待すること」 講師 高橋宏氏 首都大学東京理事長	
6月23日	留学生交流セミナー「教育について語り合う」	
7月7日	イベントセミナー「寮内対抗音楽会 合唱祭」	
7月14日	前期総括「各部の前期活動報告ならびに皆勤出席者の表彰」	
10月6日	ボランティアセミナー「夏季ボランティアの報告」	
10月13日	ディスカッション「寮の抱える諸問題について議論する」	自治セミナー 「寮について 考える」
10月20日	プレゼン「こんな解決策（ルール）を提案します！」	
10月27日	ディベート「桜都寮生はこうあるべきだ！」	
11月13日	対外交流セミナー「高尾山ウォークラリー with 和敬塾」	
11月17日	講演セミナー「トーキングスキルの習得」 講師 山本直史氏 千葉市議会議員「行動する市議会議員」	1年生企画 セミナー 「人の心を つかむ」
11月24日	プレゼンについてのプレゼン「効果的なプレゼン方法の習得」	
12月1日	第7期桜都寮代表・副代表選挙	
12月8日	セミナー案のプレゼン大会「実践」	
12月15日	イベントセミナー「寮内大運動会」	
12月22日	対外交流セミナー	
1月12日	春合宿セミナー「春合宿についての事前準備・説明」	

2 京都産業大学の取り組み事例

自主性・社会性を養う1年生中心の「教育寮」の実際

このことについて、渕上知己氏から以下の報告がなされた。京都産業大学は、昭和40年（1965年）の開学で、建学の精神は「将来の社会を担って立つ人材の育成」「全世界の人々から尊敬され、全人類の平和と幸福のために寄与する精神をもった人の育成」である。教学の理念は、自らを厳しく律しつつ、創造性に富み、社会的な義務を怠らずに、国際社会で活躍できる人材の育成である。この建学の精神と教学の理念を実現させようとしているのが、学寮の理念であり、次の3点がある。

- ① 「建学の精神」「教学の理念」に謳う高邁な人づくり教育を学生に体得させる場
- ② 世界を舞台に活躍する創造性豊かな人間育成のために、厳しく自らを律する緊張感のある生活の場の構築
- ③ 深遠な真善美を求め、知徳体を修めるための生活基盤

京都産業大学には、2種類の寮がある。一般寮と体育寮である。体育寮には、神山寮、津ノ国寮、賀茂川寮、五常寮の4つがあり、現在1年生から4年生までの274人が在寮している。一般寮は、追分寮（男子寮）と葵寮（女子寮）の2つである。追分寮には、1年生が183人、2年生が12人いる。葵寮には、1年生が143人、2年生が12人いる。

追分寮・葵寮とも、1年生対象の教育寮である。教育寮なので、アルバイトは禁止である。その代わり、寮費を低く設定している。追分寮は、開学の翌年の1966年に滋賀県に設置されたが、1982年に大学まで徒歩5分の近隣へ移設新築された。2人部屋（14.85㎡）。月額の舎費は16,000円（光熱費込）、食費（朝・夕、日曜等除く）は1日1,050円。葵寮は、2002年に大学までバスで15分のところに設置された。1人部屋（10～12㎡）。月額の舎費は15,000円（光熱費込）、食費（朝・夕、日曜等除く）は1日980円。

全国各地から入寮しているが、追分・葵の両寮ともに入寮選考がある。追分寮では1988年～2003年には面接も実施していたが、現在は、両寮とも入寮希望者からの入寮願い・作文による書類選考を行っている。

両寮には、教育スタッフ（教員）と生活スタッフ（職員）がいる。教育スタッフは、教学上（修学相談、懇話会等）の助言や指導を行う。教員のうち

から学生部長が推薦し、学長が指名。各学部から1人の8人。生活スタッフは、生活上（生活面の悩み、大学生活の目標設定、規則の遵守等）の助言や指導を行う。事務職員のうちから寮務担当課長が推薦し、理事長が指名。本年度は6人で、任期は1年（再任は妨げない）。

寮の理念は「学部の枠を超え、友情の輪の中で生涯の友を作り、仲間との共同生活の中で自律心を養う寮」で、3つの教育目標がある。

- ① 生活基盤を身に付ける（規則正しい生活習慣）
- ② 自立・自律心を養う
- ③ 本学の中核的な存在の素地を培う

両寮の運営の特徴は、班制度での運営と週番業務である。班制度とは、1年生の班員（追分寮で14～16人、葵寮で11～12人）と2年生の班長で班を構成して、「自分たちのことは自分たちで行う」という目的を達成するものである。この目的から、週番業務というものが出てきた。これは、各班2人の当番が1週間業務を担当するというもので（輪番制）、1年間を通して全員が当番業務を行う。毎週水曜日19時30分からは、週番会議が開催される。週番業務の具体的な担当事項としては、朝の点呼、班日誌の記入と提出、日誌の指示、連絡事項の伝達と徹底、夜の点呼、ラジオ体操の実施、浴室・洗濯室の清掃、自転車置き場・バイク置き場の整理整頓、その他寮生活に関することとなっている。

月に1回、班長会議が開催される。これは、寮務担当職員と班長の情報共有の場である。各班での問題点や課題・行事の打ち合わせが行われる。日課、交通、衛生、食事、洗濯、会計などの各担当からの報告や問題点の指摘もなされる。

寮の教育プログラムが2つあり、全員ほぼ必修になっている。1つは、「自己発見と大学生活」という科目である。これは、本学の共通教育科目（キャリア教育形成支援教育科目）になっていて、1年生が春学期に履修する。大学入学という人生の1つの節目をキャリアデザインへの大きなステップとして捉え、大学生活やその後の社会や仕事、働くことなどについて、受講生どうしで一緒に考える科目である。出席率は非常に高く、学生からの評判もよい。

もう1つは、平成24年度の場合、硬式野球（関西6大学野球）の寮生全員による応援である。これにより、仲間と共に応援する楽しさを知り、大学へ

の愛着が増し、何かに打ち込むことに魅力を感じるようになることが期待される。もちろん、寮では、学生がクラブや課外活動に参加することを推奨している。

両寮の日課は、次のようになっている。

追分寮（男子寮）		葵寮（女子寮）	
7：10	起床	7：00	起床
7：20	ラジオ体操及び点呼	7：05	点呼
7：30～9：00	朝食	7：10～7：20	清掃
18：00～21：30	夕食	7：30～9：00	朝食
18：00～22：30	入浴	18：00～22：30	夕食
22：30	門限	18：00～22：30	入浴
22：40	点呼	22：30	門限
23：00	消灯	22：40	点呼
		23：00	消灯

寮生は、学寮の理念に共鳴したうえで応募した学生である。寮では、新入寮生研修や班制度などを通して、寮生活のルールの理解と遵守を徹底している。アルバイト禁止、バイク原則禁止で、日課を遵守しなければならない。その結果、寮生のクラブ加入率は高くなっている。平成24年度の場合、大学平均で55.8%、葵寮で68.2%、追分寮で80.0%である。学業成績の優秀者も多く、1年次終了時点で、2010年度は全学で131人、うち寮生が20人（寮生の割合は15.3%）だった。2011年度は全学で128人、うち寮生が27人（寮生の割合は21.1%）だった。

地域の交通・防犯の啓発活動をする学生のチーム「サギタリウス」活動への参加も寮生が中心となっている。隊員には所轄の警察署長から「防犯推進委員」の委嘱状が交付される。具体的な活動としては、学生部職員が運転する青パトによる近隣小学校通学路巡回（週に2～3回、1回に2～3人）、大学や寮での防犯教室の開催、警察・近隣住民とのバイクヘルメット指導（大学及び近隣の駅）、警察・近隣住民とのビラ配り（バイク・自転車盗難防止）、近隣の女性防犯チーム（社会人）との連携などを行っている。隊員32人のうち、寮の在寮者及び経験者が15人で、隊長・副隊長も寮生である。

寮正活を終えてのアンケート結果で、共同生活が楽しかった・まあまあ楽しかったと回答した割合は、追分寮で97.2%、葵寮で99.3%だった。今後の課題については、次の3点がある。

- ① 班長（2年生）の研修方法（班長の成長が寮を変える）

- ② 入寮選考の方法の見直し（いかにして意識の高い者を入寮させるか）
- ③ 両寮が本学の中核的な存在の素地を培う寮となっているかなどの検証（クラブや自治会での活躍、学業成績、卒業率、就職率、卒業生の活躍など）

3 立命館アジア太平洋大学の取り組み事例

AP ハウスにおける実践的な取り組み／AP ハウスにおける学生の学びとは？

「AP ハウスにおける実践的な取り組み」について、松本淳氏から以下の報告がなされた。立命館アジア太平洋大学（APU）は、大分県・別府市との公私協力により2000年4月に別府市に開学した。学部はアジア太平洋学部と国際経営学部の2学部、大学院はアジア太平洋研究科と経営管理研究科の2研究科である。大学院の授業は英語のみにより実施される。学部と大学院を合わせた学生数は、非正規の96人を含めて、5,734人である。そのうち、国内学生（日本人学生）が3,208人、国際学生（83ヵ国・地域からの外国人留学生）が2,526人である。全学生に占める割合は、国内学生が55.9%、国際学生が44.1%である。

APUの学生寮（APハウス）の設置目的は、次の3点である。国際学生は、1年次全寮制になっている。国内学生の1年生は、約4割が入寮している。

- ① 社会、大学生活への適応支援
- ② 安心、安全（地域社会の不安など）
- ③ 多文化交流の拠点

APハウスには、3つのタイプがある。2000年4月に設置されたAPハウス1で、これは424人収容のシングルタイプである。APハウス2は、2001年9月に設置された508人収容のシングルタイプで、そのうち30室は博士課程学生用となっている。2007年4月には、1と2に増築したかたちで、378人収容のシェアタイプの居室が設けられた。

APハウスの年平均の入居率は約80%で、国際学生が約7割、国内学生が約3割である。全体の約7割が1年生である。男女混住で、国籍や性別などを考慮した部屋割りにになっている。シェアタイプの居室は、「国内学生と国際学生のペア」になっている。学生寮は、言うまでもなく教育寮である。

管理運営はAPハウス運営委員会が行い、議長はAPハウス長（学生部長）である。日常的管理運営はスチューデント・オフィス（APハウス・オフィ

ス)が担当し、寮内オフィスに常駐事務職員が8人いる。そのうち、専任職員は2人である。管理人は外部委託で、昼間は4人体制、夜間は6人体制の24時間管理を行っている。その他に、レジデント・アシスタント(RA)がいる。RAは、各フロアに2人ずつ配置されている。

原則として、国際学生の新入生は全員が(11ヵ月間)入寮しなければならない。入学手続き時に入寮申込書を提出し、前納金分の寮費を納付する。国内学生の新入生の入寮(11ヵ月)は希望制だが、入寮選考がある。入試出願時に希望を申請する。

4月入学の国際学生の前納金は188,000円で、内訳は入居費が32,000円、敷金が78,000円、2ヵ月分の寮費が78,000円である。国際学生の毎月の寮費は39,000円、内訳は住居費が29,000円、共益費が3,000円、水光熱費が5,000円、寝具レンタルが2,000円である。寮費の管理は未収金督促も含めてAPハウス・オフィスが行っている。毎月1回の自動振替である。2ヵ月滞納すると退寮となる。

寮内ルールとして、寮生以外の寮への立ち入りは8時～22時である。来客の宿泊は禁止。アルコールは居室内のみ。全館禁煙で、喫煙場所は屋外に設置されている。ゴミの分別を行わなければならない。月に1回のフロアミーティングに参加しなければならない。このようなことについては、RAが管理している。

APハウスでの生活では、異文化による衝突も生じる。その衝突は、主に次の4つのことに関わっている。

- ① 宗教に関わること(それぞれの宗教儀式の理解、食事規制の理解)
- ② 食に関わること(独特の匂いを発する食品の理解)
- ③ 日本のルールに関わること(特にゴミの分別)
- ④ 生活様式に関わること(シャワーや浴室の利用方法、夜間の洗濯機の利用、自立した生活など)

シャワーのなかでトイレをする文化もあったりしてびっくりするが、異文化による衝突を避けるにはRAのサポートが重要で、それによって相互理解や思いやりを醸成していく必要があるし、またそれは可能なことである。実践的な取り組みとしては、APハウスセミナー、反対言語学習会、APハウス輪読会、平和交流ツアー、RA活動、APハウス祭などがある。

RAの役割は重要であり、それには次のようなものがある。快適な住環境

の提供、生活規範の確立とAPハウスコミュニティの創造、市民社会への適応支援、学と交流の推進、寮生の見本などである。こうした役割を遂行するためにRAに求められるものとしては、リーダーシップ、ロールモデル、コミュニケーション能力、カウンセリング能力、プロデュース力、コーディネート力などである。こうした能力を向上させるために、2008年度より1週間程度のRA研修を開始した。ここでは、基本的なルールやスキルを習得することやRAどうしの信頼関係の構築などをめざしている。

RAの能力を向上させるためにはまだ課題は多いものの、RA活動は現にさまざまな好ましい効果をもたらしている。たとえば、ハウス生活に対する寮生の満足度の高さ、ハウス生活の秩序維持、寮生活における好循環を生み出す源、RA自身の自己成長のスキームなどである。今後の課題としては、寮生の活動を活性化させるサポートを充実させることがあり、次の秋セメスターから、イベントを企画運営する学生組織を立ち上げる予定にしている。

以上の報告の終盤において、力丸晃也氏より「APハウスにおける学生の学びとは？」について以下の報告が差し挟まれた。力丸氏は、現在は立命館大学文学部の教務職員であるが、この3月にAPUを卒業したばかりである。APUでは、1年間の寮生活の後、2年間のRAを経験している。以下は、力丸氏の報告内容である。

APハウスには、だいたい50ヵ国から1,200人くらいの学生が集まってきている。そのうち、日本人は約30%である。各フロアに2人ずつ配置されているRAは、基本的に日本人と外国人留学生がペアで構成されている。外国人留学生は、だいたい10ヵ国からの64人である。RAがさまざまな仲介役を果たすことによって、寮生はさまざまな学びを行うことができる。たとえば、何気ない日常生活、言語交流、異文化理解、共同生活、交流イベント、各国料理、協働プロジェクト、世界祭などである。

このような学びを通して、寮生はさまざまな能力を身に付ける。たとえば、異文化協働能力、異文化適応能力、寛容性、コミュニケーション能力、日本の生活習慣、言語能力、世界的視野、他人を思いやる心などである。

RAになるためには3回審査がある。任期は1年である。毎週火曜日は、日本語と英語によりRA全員でミーティングを行う。RAは、寮生の両親・兄弟・姉妹のような存在である。RAリーダーズが3人いて、セメスターごとに選挙で選ばれる。棟リーダーズが6人いて、各棟から1人が選ばれる。カ

テグリーリーダーズが6人いる。カテゴリーには、財務、life、media、外部、SRA、教育の6つがある。棟メンバー RA が各棟に10～12人いて、必ずいずれかのカテゴリーに所属している。

RA の主な業務は、寮生の日常的なサポート、RA 全員のミーティング、フロアミーティング、プロジェクトミーティング、キッチンデューティ（毎日のキッチンの清掃）、寮祭や棟・フロアイベントなどの企画運営、寮生の入寮時の対応・案内（ピックアップ）、寮生の交流促進、通訳、緊急時の対応などである。

寮生活及び RA 経験者として力丸氏が伝えたいことは、次の3点である。

- ① AP ハウスは留学生のためだけの厚生寮ではなく、留学生と日本人学生が混住する教育寮になっているので、日本人学生にとっても学びのある寮になっている。
- ② 寮ではRAが果たす役割が重要である。いかにしてRAに価値をもたせ、誇りをもたせるかが課題である。
- ③ しかし、何よりも大事なのは、多様な人たちとのつながりから生まれる学びである。尊敬でき切磋琢磨できる友人の存在が学びの源になる。

4 お茶の水女子大学の取り組み事例

お茶大 SCC の取り組み～学生支援プログラムの実践と課題～

このことについて、桂瑠以氏から以下の報告がなされた。お茶大 SCC (Ochanomizu University Students Community Commons) は、学内ワーキンググループによる2年にわたる検討・概念設計を経て、平成23年度から開寮した。この間、欧米の学生寮を視察して、学生寮の教育的機能について学んだ。その結果、人間形成機能を担う教育寮を設計することになり、コンセプトは「共生を強制する学生寮」というものになった。

お茶の水女子大学には3つの寮があり、それぞれに機能分化している。3つの寮とは、留学生と日本人学部学生対象の「国際学生宿舎」（徒歩と電車で約40分、399人収容、月額寄宿料4,700円）、大学院学生対象の「小石川寮」（徒歩3分、77人収容、月額寄宿料4,300円）、学部の1～2年生対象で小石川寮の隣に新築されたお茶大 SCC（徒歩3分、50人収容、月額寄宿料30,000円）である。

お茶大 SCC の理念は、次の 3 つである。

- ① 寮生同士の交流
- ② 主体性・自律性を養う
- ③ 広い視野・学修の促進

これらの理念を実現する仕掛けとして、ハウス制、寮生組織、学寮ガイド、大学の管理運営組織、学生支援プログラムが設けられている。

ハウス制とは、1つのハウスに5人の寮生を住ませ、全部で10のハウスを設けることである。ハウスの構成では、学年・学科が混在するようにする。週1回のハウス会議など、ハウス内での活動を実施させる。家事の仕方、掃除当番などは、ハウスで話し合って決める。ハウスにはハウス長1人を置く。50人の全寮生で「寮生協議会」を構成し、各ハウスごとにハウスメンバーが5つの役割を担う。寮生協議委員会、整備委員会、清掃・ゴミ委員会、寮祭実行委員会、自主企画委員会の5つの委員会があり、それぞれの役割に10人の寮生が属し、各委員会ごとに月1回の会議を開催して活動を行う。

寮での暮らし方、学生支援プログラムの実施方法、地域との関わり方など、寮生活全般に関する事項をまとめたガイドブックとして、『学寮ガイド』というものを作成している。この『学寮ガイド』については、入寮時に全寮生に配付し、オリエンテーションのときに説明している。

寮の管理運営組織としては、次の3つのものがある。

- ① 学寮アドバイザー（大学と寮生のパイプ役、寮生の相談窓口）
- ② SCC サポーター（学外からのサポート機関、寮生同士の交流を促進させる）
- ③ その他、学生・キャリア支援チーム、学生相談室など、学内外の機関と連携

お茶大 SCC の3つのコンセプトに基づいて、学生を支援する「学生支援プログラム」が用意されている。寮生同士の交流を促すウェルカムパーティや寮祭などのイベント、寮生自身が企画運営する自主企画、大学が提供する学修プログラムなど、多彩なプログラムを通じていろいろな友人と交流することにより、かけがえのない体験・成長が得られると期待されている。これを一覧表にまとめると、次のようになる。

学生支援プログラム			
お茶大 SCC の コンセプト	寮生同士の交流	自主性・自立性を養う	広い視野・学修の促進
学生支援 プログラム	交流プログラム (ウェルカムパーティ、 寮祭など)	寮生による自主企画 (ボランティア活動、 映画上映会など)	学修プログラム (地域・社会との共生など)
組織体制	学寮アドバイザー	寮生組織 (寮生協議会／ハウス長)	学生支援室／ 学生支援センター

お茶大 SCC のハウス 1 つ当たりの専有面積は40㎡、プライベートスペースの専有面積は7㎡である。管理人や警備員については、24時間常駐し、寮内の日常的な問題に対応する管理委託をしている。2011年4月に竣工したお茶大 SCC は、2011年度グッドデザイン賞（住宅部門）を受賞した。

2～3月にかけて、入寮生選考が行われる。「所得制限」と「入寮希望者の作文（入寮への抱負）」の2つが選考要件である。入寮許可者には、ガイドブックが送付される。現在の在寮生は1年生28人、2年生21人の49人で、1室は学寮アドバイザーが必要に応じて利用している。4月には、新寮生オリエンテーションとハウス長オリエンテーションが実施される。寮生の企画によるウェルカムパーティも実施される。

ハウスごとのルール、ハウス内の生活スタイルなどは、ハウスによってさまざまである。ハウスリビングの使用状況は活発で、勉強会、テレビ視聴、誕生会、鍋パーティなどが行われている。ハウス内やハウス間でのトラブルや問題も報告されているが、大学としては、できるだけ寮生が自分たちで話し合って解決するようにしている。しかし、どうしても困難な場合は、学寮アドバイザーによる指導で解決することもある。

朝食は寮生が1人ひとり別々に食べることが多い。日中は大学、サークル、アルバイトなどに出かける。サークルや学外での活動に力を入れている寮生も多く、日中は寮生同士が関わる機会は少ない。夕食は数人で作って食べるハウスが多い。夕食後は掃除、洗濯、入浴、勉強などを行っている。休日や放課後は、ハウスや同学年の寮生同士で行動したり遊びに行ったりすることもある。

昨年度（平成23年度）に実施した交流プログラムとしては、次のような6つがある。

- ① 新入生オリエンテーション、ハウス長オリエンテーション（4月）
- ② チームワークづくりのためのワークショップ（4月）

- ③ ハウスの表札づくり（5月）
- ④ コミュニケーションを円滑にするワークショップ（9月）
- ⑤ 新年の抱負を考えるワークショップ（1月）
- ⑥ 1年の振り返りと来年度に向けたワークショップ（3月）

交流プログラムの成果と課題としては、次の4点が挙げられる。

- ① 交流も大切だが、まずは自立的な生活を学ぶことが基本である。清掃や門限の徹底などについて指導する必要がある。
- ② ハウス内、同学年などのコミュニケーションは活性化している。
- ③ 大学スタッフ先導型になっており、寮生同士での自発的な交流が少ない。受け身にならないようにするため、課題設定を工夫する必要がある。
- ④ はじめからやる気のある寮生は、一部である。したがって、まずはコアメンバーを育て、コアメンバーから寮生全体へと働きかける必要がある。

自主企画では、やってみたいイベントや活動をハウスごとに企画して実施する。他のハウスの活動にも積極的に参加していくことが求められる。自主企画の流れは、次のようになっている。

- ① 自主企画案の作成
- ② 自主企画の実施
- ③ 自主企画報告書の作成

昨年度（平成23年度）に実施した自主企画としては、次のような8つがある。

- ① ウェルカムパーティ（4月）
- ② 映画上映会（8月）
- ③ 寮祭（各ハウスから、1つずつ企画を出す）（10月）
- ④ 東京探検ウォーキング（11月）
- ⑤ 鍋パーティ（12月）
- ⑥ SCCの映画撮影（翌年のウェルカムパーティで上映）
- ⑦ Let's カーヴィーダンス（1月）
- ⑧ フェアウェルパーティ（3月）

自主企画の成果と課題としては、次の2点が挙げられる。

- ① 「自主」企画ではなく、「義務」企画になってはいないか。「これならやりたい」と思わせる工夫が必要である。
- ② 寮内の仲間内での活動が多く、寮外への活動に広がりにくくなっている。

る。外へ出ていきたくなるような働きかけをしていくことが必要である。

大学が提供するプログラムとしては、学修プログラムがある。本学教員が年に4回の講演を行う。講演の約1ヵ月後に、ハウスごとに学修発表を行う。学修プログラムの流れは、次のようになっている。

- ① 教員による講演
- ② ハウス内での議論、発表資料の作成
- ③ ハウスごとの発表（各10分）

昨年度（平成23年度）の学修プログラムは、次のとおりである。

〈講演者とタイトル〉

- 第1回 羽入学長「オープニングレクチャー」
- 第2回 耳塚副学長「大学生活で何を身につけるか」
- 第3回 元岡准教授「キャンパスに見るお茶の水女子大学の歴史」
- 第4回 寮生自主企画「キャリアに関する OG 懇談会」

〈寮生発表例〉

- 第1回 「歴史的観点から女性リーダーを考える」
- 第2回 「大学生活で身につけたいこと」
- 第3回 「公共施設の建築物の特徴」など

学修プログラムの成果と課題としては、次の3点が挙げられる。

- ① やらされている意識が強く、学修の深め方もハウスによってまちまちだった。どんな形ならやる気になるのかを寮生と考え、進め方を一新する必要がある。
- ② 出席率が悪い。出席者が固定している。進め方を改善するとともに、欠席届制などを導入する必要がある。
- ③ 学外への交渉が困難だった。学寮アドバイザーや関連センターの教員がその都度仲介しているが、寮生が主体的に交渉事を進めていくことが今後の課題である。

以上において、お茶大SCCの個別の取り組みについて見てきたが、SCCの実践を全体として見たときの成果と課題としては、次の3点が挙げられる。

- ① 寮生の自主性を引き出す工夫が必要である。はじめは、さまざまな仕掛けが必要である。その後は、状況に合わせて修正しながら、寮生の自主的な意欲や活動をサポートしていけばうまくいく。
- ② 大学側と寮生側が関わり続けることが大切である。関わり続けていれ

ば、様子の変化に気づきやすくなるし、即時対応することもできる。

- ③ 自分たちで SCC をよりよく変えていこうとする意欲を伸ばすことが大切である。そのためには、SCC の文化と一緒に作っていくことが必要である。

学内外への情報発信も重要である。まずは学内へ情報発信をして、学内での連携を図っていく。学外への情報発信にも力を入れ、学外の関連機関との情報交換や連携を図っていく。平成23年度のメディア取材は5件で、寮生の取材記事が各社新聞や雑誌等に掲載された。

今後の課題としては、次のような8点を考えている。

- ① 他のハウスとの関わり
- ② 他の2つの既存寮との関わり
- ③ 近隣・地域との関わり
- ④ 主体的な活動
- ⑤ 寮生同士の交流を促進する仕掛け、中核的な人材の育成（平成25年度から RA 制度を導入する予定である）
- ⑥ 時には、葛藤経験を生かす「共生」のサポート
- ⑦ 門限や清掃など、最低限のルールを徹底させた自立性の養成（そのためには、なぜそうしなければならないかの理由を理解させる必要がある）
- ⑧ 後々は、留学生を含めた国際交流ハウス

以上が桂瑠以氏の報告である。この報告の途中の2箇所、お茶大 SCC サポーターの瀬田すみ恵氏から、事例報告が差し挟まれた。1つは「交流プログラム」について、もう1つは「自主企画」についての事例報告だった。SCC サポーターは学外機関からの協力であるが、瀬田氏によると学外者の立場から見てもお茶大生はとても優秀だそうである。

交流プログラムにおけるワークショップの流れは、導入説明→アイスブレイク→アクティビティ→ダイアログ（話し合い）→今日の振り返りとなっている。一般にお茶大生はとてもいまどきの女子大生とは思えないくらい落ち着いていて（つまり、ちゃらちゃらしていない）、極めて堅実であるそうだが、大学側としてはもう少し冒険心をもっと積極的に挑戦してほしいと思っているそうである。そのような状況のなかにあっても、瀬田氏によると、交流プログラムでは寮生たちはとても明るく楽しく活動してくれたそうである。特に、アイスブレイクとダイアログでは、場の流れをよく読んで活

動していた。

自主企画の事例報告では、ウェルカムパーティを企画したときの様子が報告された。寮生たちが自分たちから「ウェルカムパーティにもアイスブレイクの手法を取り入れたい」と言い出したそうである。そうになったのは、以前の交流プログラムでアイスブレイクはとても効果的だと寮生たちが思ったからだそうである。そのようなことから、ウェルカムパーティでは、ネームタグには「呼ばれたい名前」「出身地」「好きなこと」「ひとこと」「イラスト」などを書くこととし、たとえば「ペアの人との共通点を20個見つけよ」という課題が含まれる「共通点探し」というゲームなどを企画した。

以上が4つの大学の取り組み事例である。この報告の後、休憩を挟んで、フロアディスカッションが行われた。ここでは、質問紙（ディスカッションペーパー）による質問への回答がなされた。質問紙による質問は、5つあった。

○ 寮生活を通しての学生の成長というものをどう見るか。

- 部の活動を通して、寮生には実行力が身に付いた。（首都大学東京）
- ルールの大切さについて、寮生が自ら自覚するようになった。（京都産業大学）
- 寮生には、積極性や行動力が身に付く。（APU）
- 寮生には、主体性が身に付きつつある。（お茶の水女子大学）

○ 教職協同というものについてどう考えるか。

- 教員と職員の協力が重要であることは言うまでもないが、現実ほとんど事務職員の努力で寮運営がなされている。教員の協力をもっと得られるようにしなければならない。（首都大学東京）
- 教育には、「学問面」と「生活面」の2つがある。これを教職協同で行えばよいのではないかと考える。（お茶の水女子大学）

○ 京都産業大学の規則は厳しすぎないか。

- 寮生活は学生主体が基本だと考えている。ただし、集団生活や社会生活のなかでは、ルールも大事になってくる。そのためには、生活基盤が大事だと考えている。本学は管理主義を取る気もないし、実際、管理主義になっていない。ルールのほとんどは日課である。（京都産業大学）

○ 寮生活を活性化するための秘訣は何か。

- 寮の運営に民間のノウハウを導入している。（お茶の水女子大学）

- RA などによるインセンティブやモチベーションについてどう考えるか。
- RA の役割はオブザーバー的なものではないかと考える。RA 主導ではなくて、あくまで寮生の自主的活動が中心である。(首都大学東京)
 - 班長公募を行っている。こんな先輩になりたいという気持ちから寮生は応募してくる。(京都産業大学)
 - 自分も先輩になったら後輩のお世話がしたいという気持ちで RA に応募してくる。ちなみに、RA の報酬は月額 2 万円である。(APU)

最後に、お茶の水女子大学理事・副学長の耳塚寛明氏から、次のような閉会挨拶がなされた。学生寮と言えば、かつては貧困学生対策の施設か学生紛争の温床だった。しかし、その後はいくつかの変遷を経て、現在では学生寮は大学の生き残り戦略の目玉になっている。1 つには、素晴らしい学生寮を用意すれば学生募集に役に立つのではないかとという考えがある。つまり、受験生の増加が見込めるのではないかとという考えがある。もう 1 つには、学生寮がすばらしければ、そこですばらしい人間形成ができるのではないかとという期待がある。この人間形成機能は、具体的に言えば、学生が大人になっていく移行を大学が手助けするということである。つまり、どんどん幼稚化していつている現在の大学生に自律性や自立性を培わせるということである。その自律性や自立性の育成について、大学が手取り足取りでやってあげている。これは矛盾ではないか。とはいえ、本日のシンポジウムには思わぬ反響があってびっくりしている。いろいろと調べてみても、寮に関する勉強会や研究会はあまりないようなので、今後もこのようなシンポジウムを開催したい。

以上でシンポジウムは終了した。教育寮としての学生寮を大学教育のなかでどう位置づけて運営していくのかという問題には、その大学の最も基本的な教育方針からしか取り組んでいくことはできない。福岡女子大学でそのような議論がなされる際に、この報告書が参考になることがあれば幸いである。

* (註) このシンポジウムでは、マスコミ等の報道関係者以外の参加者には、録音、写真撮影、ビデオ撮影等は禁止されていた。